hi fashion

Monthly Fashion Magazine, Tokyo August 1991 No.208

8

hi fashion view
ヴーナス'91
ニューフリール風、クチュールスポンティなど、
11人の女性像

welcome
to aquarium
水族館は海の宝石箱。
アクアリウムの夢。荒俣宏

world collections
'91-'92秋冬ワールドコレクション。
第2弾！パリ、ソウル、ニューヨーク、リスボン。

designer's
special
クリスチャン・ラクロワ
時代の寵児、5年めの跳躍。

Christian Lacroix

世紀末を華やかに超越する男。
大石尚・文
南仏プロヴァンスの
エスプリを世界に届ける人。
藤井郁子・文

「小山」 プラスチック、ろう、新聞紙(48.3×106.8×38.1cm) 1990

courtesy : fiction／nonfiction gallery

「脚」 靴、ろう、プラスチック、ティッシュペーパー
(81.3×22.9×10.2cm) 1990

photograph:Hiroko Tanaka

ART IN NEW YORK
田中弘子のアート・イン・ニューヨーク

text:Hiroko Tanaka

RONA PONDICK
ローナ・ポンディック
美と醜の間に在るもの

ひとが美しいと感じ、醜いと感じる。その間には何か明快な一線があるのだろうか。それとも、愛と憎しみというふたつの相反した感情がバッサリとふたつには断ち切れないものであるように、美と醜も前後左右に、あるいは表と裏に行きつ戻りつ、揺れるものなのだろうか。

ひとはなぜ奇型なもの、グロテスクなものに魅せられるのだろうか。なぜそれらは沢山のひとの眼を惹きつけ、心を騒がせることができるのだろうか。

死というアイデアはなぜ怖れと魅力を同時に持つことができるのだろうか。

ひとがものに深く惹きつけられるとき、その理由が自分でも分らないことがある。ただそれが繰り返し何度も何度も起きる。幾度となくそれに魅せられる。

だからポンディックはその答えを見つけようとしてアートに向かったのだ。

一時期ポンディックは人糞のスカルプチュアに凝っていたことがある。部屋の向うから濃い茶色の人糞色のロウを投げつけ、人糞の小山のような固まりを作った。4年前に作られたその作品には「わたしのやつ」というタイトルがつけられている。アートとしての抑制と、実物にいかに近づけるかという率直さのそれはプレイだった、とポンディックは語っている。その作品はいかにも真実らしく見える一方で、本当にアレなんだろうかとひとを疑わせる際どいユーモアを持っている。

ポンディックはまた使われすり減った靴にも魅入られた。履かれた靴は、その靴の上に存在した人間を即座に想像させる。それは人糞同様に我々自身の肉体の延長であり、すり減ったそれにはいつも不快感がつきまとう。

「ラブシート」と題された椅子は座席部分はまるで女性の乳房かあるいはお尻のように丸っこくユーモラスである。だが左右の男の一対の黒い靴と、細い脚を持つ真ん中の子供の靴の対照はいかにも奇型であり、不安だ。なんだか可愛いわね、と笑ったあとで、なにかザラッと納得できない感情が残る。

白い汚れたハイヒールにくっ付いた脚は余計不気味だ。作品「脚」は、上部のゴツゴツした質感と妙にたよりない足首が決して歩くことのない見せもの(フリークス)の脚を連想させる。

血のように赤い歯肉と白い歯がベチャベチャとおしゃべりをしている「小山」という作品は、多分その歯ぐきの赤さのせいで、ユーモアも攻撃的に感じられる。「こんなことは打ちあけたくないけど、わたしは人々と立ち話をしていて、何かこうジューシィな人々に噛みつきたくなる衝動にかり立てられることがあるの」

そのオブセッションが笑っているアタマの山を作り出した。ゴロンゴロンとしたアタマはコブみたいにつながっていて、皮膚であるべき新聞紙の継ぎ目には歯ぐきと同じ血の色がにじんでいる。

神聖な行為である授乳はまた子供が持つ最も初期の性的な経験でもある。ベッドは文字通り生と死をふたつながら迎える儀式の場所でもある。ポンディックはものが生来持っている豊かな暗喩を饒舌に利用するアーティストである。「ベッド・ミルク・靴」というタイトルのショウを2年前に行なっている。

ローナ・ポンディック、1952年ブルックリン生まれ。初めエジプト彫刻のかたちとその象徴性に惹きつけられた。そこに人間の精神を具体化する試みをみたのだ。ミニマルアートは大好きだったけれど、自分の表現したいものとの間には大きなギャップがあった。大学でアートを学び始め、すぐによりフィジカルなスカルプチュアに向かっていった。それが我々の現実の世界の中に存在することが彼女を面白がらせる。

イエール大の大学院で出会った夫はペインター。クーパー・スクエアの日本風にいえばウナギの寝床、細長く奥の深いスタジオをふたりで分けて使っている。お互いの感覚は違っても興味とアイデアは共通しているという幸せなカップルだ。

美と醜の間にあるものに魅入られたアーティストそのひとは健康感の漂う美人である。洗濯の効いたブルージーンズがよく似合う。そしてもちろん、スタジオにいることが一番好きな働きもののアーティストでもある。

「ロールシャッハ・テストみたいに沢山の解答の可能性を与えるような作品をわたしは作りたいの」

それは勿論あるひとは美しいと思い、もうひとりは醜く不快と感じる、人々の一番奥深い感覚、タブーを刺激するものであるはずだ。

「どんな反応も正しいと思うの。笑ってくれる人々を見るのは好きだけどね。と同様に不快感を持ってくれてもいいわ」

そう言いながらポンディックは自分の作品はビューティフル、そしてエレガントだと実は固く自信を持っているのである。

「ミルク」 ミックスト・メディア(右：55.9×83.8×81.3cm) 1989